

## フローラ・アニー・スティールの『陶工の親指』について

— インド支配の現実を見つめたMEMサーヒブ —

小西真弓

フローラ・アニー・スティールの『陶工の親指』 (*The Potter's Thumb*, 1894年) は、インド大反乱時を舞台にした彼女の代表作『水の面を』 (*On the Face of the Waters*, 1896年) とは異なり、インド人とイギリス人の「ゲーム」に最終的に「勝利する」のは、陰謀を企てて帝国政府が管理する用水路の水を奪うインドのノーチ・ガール (nautch girl, 〈踊り子〉) という奇想天外な幕切れをする物語である。「女キプリング」と評される作者が描くインドの治水を巡る物語とならば、パンジャブ州の治水に献身するイギリス人の苦難や功績が称えられそうなものの、この小説には、賄賂を受け取ったり、放埒なMEMサーヒブに翻弄された挙句に、インド人が仕組んだ陰謀にはめられて破滅に追い込まれるイギリス人官吏が登場する。そのため、最終的には正義感のあるイギリス人が陰謀事件を解決し、事態を收拾するものの、物語全体からすれば、帝国主義の「確信の時代」のアングロ・インディアン小説の作風<sup>1)</sup> 即ちイギリス人による帝国支配の正当性を喧伝するというよりは、それが揺らぐものであるという印象を受ける。にもかかわらず、『陶工の親指』が「傑作」として評価されたのは、<sup>2)</sup> この小説が当時台頭しつつあったフェミニズムの問題を絡めながら、作者が体験したインド支配の実情を訴えている故であろう。

キーワード：フローラ・アニー・スティール (Flora Annie Steel)

『陶工の親指』 (*The Potter's Thumb*)

ノーチ・ガール (nautch girl)

\* テキストには、Flora Annie Steel, *The Potter's Thumb: A Novel* (New York: Harper & Brothers, 1894) を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。また本稿では、アングロ・インディアン (Anglo-Indian) という言葉を「英領インド時代にインドに長期滞在したイギリス人」という意味で使っている。

1) Allen Greenberger, *The British Image of India: A Study in the Literature of Imperialism, 1880-1960* (London: Oxford UP, 1969) 5 参照。

2) アングロ・インディアン小説の研究者、E.F.オートンは、『陶工の親指』を「スティール夫人を、アングロ・インディアン小説家の第一線に据える芸術作品である」と評価している。Edward F.Oaten, *A Sketch of Anglo-Indian Literature* (London: Kegan Paul, 1908) 162 参照。

## 序

インド高等文官の妻、いわゆる「本物のメムサーヒブ」(Pukka Memsahib)として、1869年に夫の赴任先のパンジャブ地方を訪れたフローラ・アニー・スティールは、旱魃や洪水に襲われる当地において、治水、とりわけ灌漑設備の構築や維持・管理が為政者の重要な役割であることを感じた。<sup>3)</sup> 領土の安泰や支配者の力量は、いかに水を制するかによって測られることを、キプリングと同様に彼女が深く認識していたことは、『陶工の親指』ばかりではなく、『万軍の神』(*The Hosts of the Lord*, 1899年)や『スチュアート嬢の遺産』(*Miss Stuart's Legacy*, 1893年)にも盛り込まれるダム建設や灌漑工事のエピソードからも窺い知れる。

1849年にパンジャブを併合して以来、帝国政府が半砂漠だった当地の灌漑事業に乗り出したのは、戦闘精神が旺盛なシーク教徒やイスラム教徒を耕作民として定住させ、自分たちの支配を安定させることを目的としていた。イギリス支配に組する兵隊を大量に供給したパンジャブ出身の退役軍人に報償として耕作地を与える必要から、当地の灌漑は、優先的な事業であった。とはいえ、乾季と雨季の降水量の差が激しく、熱砂地獄のような砂漠もあるパンジャブに灌漑用水路を構築するのは、至難の業であり莫大な費用と技術力、関係者一同の忍耐と努力を必要とした。また、19世紀後半のパンジャブにおいては、用水路がかなりの規模まで建設されていたが、もともと河川の水が不足するために、耕作に必要な水を十分賄いきれず、政府は耕作地の状況に応じた平等な配水に細心の注意を払わなければならなかった。配水をめぐって、イギリス人官吏がインド人領主から接待を受けたり、賄賂を贈られたりすることが黙認されがちだったのも、用水路の修繕・管理には在来の領主に協力を求めざるを得なかったためである。<sup>4)</sup> このような裏事情も反映されている『陶工の親指』には、キプリングの「橋を造る人」(“The Bridge Builders”, 1894年)と同様、インドの近代化を目指す「白人の責務」を担う公共事業局の官吏が登場するものの、その様々なエピソードが浮き彫りにしているのは、高度なイギリスの土木技術でもなければ、大洪水に立ち向かうエンジニアたちの献身ぶりでもない。物語の冒頭から、公共事業局に勤務するイギリス人官吏たちが、地元にも利便な配水を求める領主(Diwan)から賄賂を受け取る有様は、<sup>5)</sup> この作品が「白人の責務」を称えるというよりは、むしろその限界を予期させている。

3) 1871年にスティール夫妻の最初の赴任先カスール(Kasur)には当初、井戸しかなく園芸用の水も不足したので、夫ヘンリーは当局に対して「ラホール市近郊を通る大用水路から、町まで支水路を通す」ことを嘆願したという。また、夫妻は旱魃後に突然訪れたモンスーンの豪雨で、民家の半数以上が崩壊した「洪水」も経験した。Flora Annie Steel, *The Garden of Fidelity: Being the Autobiography of Flora Annie Steel, 1847-1929* (London: Macmillan, 1929) 59, 82-86 参照。

4) 19世紀後半のパンジャブ州の灌漑については、Henry Frowde (ed.), *The Imperial Gazetteer of India: The Indian Empire*, new ed. vol. 3 (Oxford: Clarendon, 1908) 316-28 参照。

5) 用水路からの配水をめぐむ問題については、R.B. Buckley, *The Irrigation Works of India*, 2nd ed. (London: E & F. N. Spon, 1905) 282-85 参照。

## I

『陶工の親指』の主要な舞台となるホッジナガル（Hodinuggur）は、パンジャブ州のラージプル（Rajpore）の南方にあるとされる架空の小さな町である。「砂塵の堆積地」と形容されるその町の近郊には、鷹狩りやヤマウズラ狩りを楽しめるジャングルがあるものの、耕作可能な土地はごくわずかだった。そんな辺鄙な土地にラージプルの公共事業局に採用された新米のジョージ・キーン（George Keene）が派遣されたのは、当地を流れる用水路の水門が度々、規則に反して開けられることを阻止するためであった。ロンドンの王立工科大学を卒業後パンジャブに赴任して間もない彼は、その半砂漠の風土に驚くばかりであったが、とりわけホッジナガルで井戸から水を汲む農民の姿を見て、いかに水が彼らの命綱であるかを悟る：

野原では小百姓たちが、わずかな作物を得ようと働いていた。ジョージは赤レンガのバンガロー（官舎）に入ろうとした時、立ち止まって彼を感動させずにはいられぬ叫び声を聞いた。村人たちは、水の恵みの神を称える叫び声と共に、自分たちと死の間にある井戸の水を汲んでいた。本当に、砂漠の荒地では、水が万物の母だ。水が生命活動の原動力であるとしても何の不思議があろうか。大用水路が、銀の刀剣のように、その水門が開くのを望む人々と望まぬ人々を二分するのも、不思議ではない。（33）

小百姓同様、領主（Diwan）のズーブルザマン（Zubr-ul-Zamân）一族と彼のお気に入りのノーチ・ガール、チャンドニ（Chândni）が「水門が開くのを望む人々」の側にあるのは当たり前のことであった。<sup>6)</sup> 彼らにとって、宮殿の脇を流れる用水路から自由に取水して、領地を潤すことができないことは、この上なく不満だった。水さえあれば、耕作地や牧草地も広がり、領主の孫息子ダレル・ベグ（Mirza Dalel Beg）が夢中になる競馬のための種馬場を造ることもできる。取水によってホッジナガルの作物の収穫高が増えれば、地税や地代に依存する領主一族から庇護されるチャンドニの生活も安泰だった。

しかし、パンジャブがイギリスの支配下に置かれて以来、当地の水を制するのは公共事業局であり、<sup>7)</sup> 用水路の管理や維持にはイギリスの土木技術も必要であった。そのためズーブルザマンは、有利な配水を目論んで、ジョージの同僚、ダン・フィッツジェラルド（Dan Fitzgerald）を接待することに余念がない。ホッジナガルの用水路の水門が、当局が許容できないほど頻繁に開けられたのは、取水に苦勞する農民にダンが同情したからでもあったが、領主一族から接待を受けたり、賄賂を贈られたことにもよる。砂漠の中の小さな町に

6) チャンドニに対して「ノーチ・ガール」という呼称は使われていないが、長身で「半分インド人で半分ギリシア人の顔」をしていることや、その身なりや言動、バザール内の住居の様子から、彼女はカシミール出身の踊り子、タワイフ（*Tarwaif*）であると思われる。英領インドでは、南インドのデーバダシー（*Devadasbi*、寺院の踊り子）もタワイフも英語化した言葉の「ノーチ・ガール」と呼ばれたので、本稿ではこの言葉を利用する。Pran Neville, *Nautch Girls of the Raj* (New Delhi: Penguin, 2009) 23 参照。

7) 英領インドの公共事業局については、多田博一著『インドの大地と水』（日本経済評論社、1992年）157-63 参照。

たった一人のイギリス人であったダンにしてみれば、住民から敵外視されるわけにもいかず、彼らともたれ合いの関係を保つほうが居心地がよかった。

そのような状況を察知しながら、長官のツイーディー大佐 (Colonel Tweedie) が厳しく追及できないのは、用水路の維持・管理あるいは水利料の徴収にインド人領主の協力が不可欠であったからである。しかし、「水門が開くのを望まぬ」帝国政府の意向を無視するわけにもいかず、大佐はその問題を穏便に解決するために、ダンを本局へ呼び戻すことにする。彼の後任のジョージは青二才ではあるものの、一人で砂漠の町の用水路の管理を任せても、それなりに「白人の責務」を誠実に遂行しそうな青年であった。彼は初めて訪れたズーブルザマンの宮殿で、安物の贈り物として受け取った「青い壺」が、まもなく骨董品としてそれなりの価値があると知るや否や、送り返すほど誠実な若者だった。ホッジナガルでは、イギリス人官吏や軍人が家族連れで滞在するラージプルとは異なり、同胞との社交ダンスもテニスも楽しめない。しかし、ズーブルザマン相手のチェスや、ダレル・ベグに誘われる狩猟は、気晴らしになりそうだった。時に灼熱地獄のようになる砂漠の町にも、芸術家肌のジョージには、それなりのエキゾチックな魅力があった。とりわけ「青い壺」を作った陶工の子孫と思われるファズル・エラヒ (Fuzl Elahi) の陶芸技術や、宮殿内にある青いタイル張りのモスクは彼を魅了する。しかし、ゼナナ (婦人の隔離部屋) に住むイスラム女性や「バザールの女」には好奇心をそそられても、イギリスの軍人や官吏の掟に逆らう「女買い」は憤んだ。<sup>8)</sup> 宮殿に初めて表敬訪問に向かう途中で、彼の気を引こうとするチャンドニに好奇心をそそられながらも、彼はダンを見習って彼女からの挨拶を無視する：

歩道の両脇のよく見えない奥の方から、銀の鈴のような音が聞こえた。アーチ型の入り口から白い影のような何か、とても優雅な何か、暑い空気の中にジャスミンの香りを漂わせ、イギリスの旦那様たちに挨拶をしながら姿を現した。

「あれはチャンドニだよ」とダンは、彼女の挨拶を無視して言った。

ジョージは、仲間のダンに倣って挨拶を返さなかったが、スリルで血が沸き立つような感じがした。

「チャンドニだって！」と彼はその名を繰り返した。「それは〈銀のようだ〉という意味の言葉じゃないか？」

「〈月の明り〉という意味もあるよ。皆は彼女のことを、普段は〈満月の夜〉(Chandni-râat) とか〈月の照る夜〉と呼んでるんだ。本当の話だとしたら、彼女には沢山の夜の取引があるらしい。彼女とダレル・ベグの間に——でも奴が来るよ、悪びれずに脇のドアから出てくる。悪党のダレル・ベグの奴、〈月の照る夜〉が大好きなんだ」(4)

8) 1864年に「インド伝染病予防法」(Indian Contagious Diseases Act) が発令され、イギリスの軍人が、定期的に検診を受ける公娼以外の「バザールの女」を買うことはタブーとなった。この法令は間もなく廃止されたが、この種の伝染病の恐怖はその後も長らくアングロ・インディアンに抱かれていたという。スティール夫人はこの問題を『夜の声』(Voices in the Night, 1900) において取り上げている。

## II

新参のジョージに取り入ることに失敗したチャンドニは、それをダレル・ベグから嘲笑されてプライドを傷つけられる。ムガル帝国の時代には、伝統舞踊や儀礼への参加で、それなりの価値が認められていた彼女のようなノーチ・ガールも、イギリスがインドを直接支配するようになって以来、多くのイギリス女性がインドへ到来した影響もあって、「娼婦」として白眼視されるようになった。<sup>9)</sup> チャンドニにとって、イギリス人は昔のようにパトロンになることもなく、自分たちから本職を奪った「宿敵」にも感じられた。そのためジョージから挨拶も返されない彼女は身を引くどころか、ますます何とか水門の鍵を彼から奪おうと新たな画策をする。そして間もなくジョージが「青い壺」に興味を持ったことを知った彼女は、ダレル・ベグの腹違いの妹のアジザン (Azizan) にその壺を持たせてジョージに近づけることを思いつく。

ゼナナに住むアジザンにとって、一人で外出して若いイギリス人男性に近寄ることは憚られた。しかし、彼女はチャンドニに言いくめられた母親のザイナブ (Zainub) の言いつけに従わないわけにはいかない。彼女たちの期待どおり、宮殿内のモスクの前でジョージに出会ったアジザンは、「青い壺」を持っていたために彼の関心を引き、一日に短時間だけスケッチのモデルになることを承諾する。チャンドニの陰謀を知らないジョージは、病気の母親のためにモデル料やキニーネが欲しいというアジザンの要望を受け入れ、モスクを背景に「青い壺」をもったアジザンの姿をスケッチするうちに、彼女の黄金茶の顔色や明るく光る目にエキゾチックな魅力を感じる。なるほど彼女は微笑まない限り「ピクチャレスク」のモデルにふさわしい美人ではなかったが、長時間坐らせるためには「美しい」(pretty) と彼女をおだてなくてはならなかった。そのため、10日ほど会ううちにおだてられたアジザンの心に、彼への恋愛感情が生まれてしまう。素晴らしい絵が仕上がって喜ぶジョージとは対照的に、自分の役目を果たしたアジザンは、彼との別れを切なく思う。そんな彼女の気持ちを察するものの、「茶色い顔」に口付けすることをためらう彼に失望したアジザンは「青い壺」を置いたまま、ゼナナへ帰ってしまう：

「見てごらん！ できたよ！ 君は坐っていてくれたね——じっと坐っていた。10ルピー稼いだんだよ、それから——アジザン！ 可愛い子よ！ —— 一体どうしたんだ？」…

彼女は答えなかったが、彼は身構えることなく、優越感をもってかがみながら、うつむいた彼女の顔を自分の方へ向けた。彼は自由にモデルの彼女の顔をあちこちに向ける

9) インドがイギリスに直接支配される以前には、ノーチ・ガールはフィリップ・メドウズ・テイラー (Philip Meadows Taylor) の『シータ』(Seeta) に登場するペリ・バクシュ (Peri Buksh) のように、伝統舞踊の披露ばかりではなく、結婚などの儀礼を司って有力者から所有地や財産を与えられ、それなりに尊重された存在だった。彼女たちが次第に白眼視されるようになったのは、福音主義や社会改革運動の台頭によるもので、とりわけ1892年にマドラスから始まった反ノーチ法は、北インドにも広がって、ノーチ・ガールが本来の仕事を失い、娼婦化した原因になったと言われる。Philip Meadows Taylor, *Seeta* (1872 rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1989) 97-129; Nevil, *op. cit.*, 113-24 参照。

ことに慣れていた。しかし、これは何となく違った。彼の見た太陽の色とも違った。本物の太陽の色だ！彼はまだ21歳だった。だから、彼が心から屈しているような彼女の眼差しを見た時に一瞬、総てのものに降りかかるその輝きと魅惑は、彼の目を眩ませた。弱冠21歳の彼は、太陽の色のような顔の表情を今まで見たことがなかった。しかし、それは茶色でもあった！事実は事実だ。その顔に口付けするのを憚ったのは、義務感ではなく色の感覚によるものだった。(47-48)

アジザンの乙女心を傷つけるばかりか、イスラム教徒の掟を破って彼女の顔を異教徒の男性の目に晒したチャンドニが、それを知ったダレル・ベグの怒りを買うのは当然のことだった。

しかし、祖父のズーブルザマンが裏で糸を引いていることを知った彼は、チャンドニの陰謀を阻止できない。それどころか、一族が貧窮して宮殿の金庫が空になったらデリーへ帰ると彼女から脅迫されたために、水門の鍵が欲しくなり、陰謀に協力するようになる。そのような経緯を知らないジョージは間もなく、ラージプルから視察に来た公共事業局のメンバーとはぐれて、彼のバンガローに迷い込んできた若くて美しい未亡人、グエン・ボイントン (Gwen Boynton) に魂を奪われ、「青い壺」を彼女に譲ることを約束する。そのような彼の恋愛感情が新たな陰謀にとって追い風になると確信したチャンドニは、ジョージが一時的に宮殿へ預けた「青い壺」の二重底に三つの真珠とエメラルド一つを、水門の鍵を得るための賄賂として仕込む。その宝石の存在に気づかぬ彼は、ザイナブに化けて訪れたチャンドニに騙されて、壺の代金として10ルピーを払い、それをグエンにプレゼントしてしまう。

壺を気に入ったグエンは、間もなく野営地のテント火事の後に宮殿へ避難している間に、その二重底に潜んでいた「宝石」を発見する。当時、放蕩な生活のために多額の借金を背負っていた彼女は、それをジョージへの「賄賂」だと認識できたものの、横取りしたいような誘惑にかられてしまう。高価な宝石があれば、テントの火事で燃えた衣装の買い替えは勿論、借金もすべて返済できそうだった。遺族年金だけでは優雅な生活を送ることができなかった彼女にしてみれば、「宝石」を売ったお金で美しく着飾り、安楽な生活をさせてくれる再婚相手を選びたかった。さしあたり、元婚約者のダンや、彼の上司で亡き夫の従兄弟のルイス・ゴードン (Lewis Gordon) が、彼女の身近にあった。そこで彼女は事情を告げずに、デリーに出張の予定のあるダンに「宝石」を運ばせて、それを宝石商のマノハル・ラル (Mnohar Lal) に査定させる。四つの宝石が6,000ルピーの価値があると知った彼女は、罪の意識を感じながらも、それを現金化し借金まみれの生活に終止符を打つ。しかし彼女やダンの行動は、お抱えの間諜を雇っていたチャンドニには、すべてお見通しだった。

思惑通りに事が運んで喜んだチャンドニは、さらにグエンに嫉妬したアジザンの気持ちを利用して、「青い壺」をグエンの部屋から盗み出すように仕向ける。その狙いは、壺にマノハル・ラルから買い戻した「宝石」を再びその二重底に入れて、グエンに送りつけ、恐喝の種に使うためであった。しかし、アジザンは、グエンの部屋に忍び込んで壺を持ち去ることには成功したものの、同行した母親のザイナブを階段からの転落事故で失ったために、半狂

乱で宮殿から姿をくらし、陶工のファズル・エラヒに保護される。

16年前の災難で娘を失って以来、精神に異常をきたしていたファズルは、アジザンを自分の娘と錯覚し、結核を発病した彼女を介抱しながら暮らす。それを知ったチャンドニは、ファズルのもとへ行き、アジザンが持ち帰った「青い壺」に買い戻した「宝石」を再び忍ばせ、それをグエンに送りつけるように命令する。しかし、ファズルは工房の見学に来たツイーディー大佐の娘ローズ（Rose）の優しさが忘れられなかったためか、それをジョージから聞き出した彼女の住所へ送ってしまう。ローズにしてみれば、宮殿から行方不明になった「青い壺」を送られるのは、何とも不可解で、それが模造品のようにも感じられた。そのため、壺を送り主のファズルのもとへ返送するが、災いを恐れた彼はそれを宮殿に持参する。それを受け取った領主一派は「青い壺」を梱包し直して、グエンのもとへ届けるが、彼女はシムラへ避暑に出かけていたために、ジョージがその荷物を預かる。

そのような壺の不可解な往来を知ったアジザンは、遅まきながらもチャンドニの悪意に気づき、病気の身を押ししてバザールに住む彼女を責め立てに行く。自分の首に手をかけるアジザンの激昂ぶりは、チャンドニを驚かせて、口封じに彼女を階段から突き落としたい衝動に駆りたてる。しかし、アジザンのグエンへの嫉妬心は、領主一族からの協力を得るために利用価値がありそうだった。そこでチャンドニは、「青い壺」をめぐる陰謀がグエンとジョージの仲を裂くものだとアジザンを説得して追い返す。ところが、チャンドニの予想に反して、グエンに失恋するジョージの不幸を案じたアジザンは、明日からシムラへ保養に向かうという彼のもとへ「青い壺」を取り返しに行き、チャンドニが自分の母親と偽ってその壺を彼に売りつけたり、その壺を自分がグエンのもとから盗んだことを彼に告げる。結核で死を間近にした彼女の告白に信憑性を感じた彼は、即座にグエン宛の荷物の中身を悟り、ダレル・ベグの陰謀を察知する。しかし、ジャングル熱から病み上りの彼には、アジザンの告白を手がかりに、一連の事件を解明する気力や時間がなかった。やせ衰えたアジザンに、同情の念も禁じえなかった。そのため、彼はとりあえず彼女の要求どおりに、荷物の中身の「青い壺」をアジザンに渡す：

「その壺を返せだって」とジョージは声を荒げて彼女の言葉を繰り返した。「勿論、できたらそうしたい。でもできないよ。それは盗まれたんだよ——」

「壺はまた見つかったんですよ、旦那様」…

ジョージは、耳にした話が信じられず、彼女を見つめた。

「また見つかっただって——それじゃあ、君は泥棒だということになる——そうなのか」少し間をおいて、彼女は返事をした。「旦那様は、いつも本当のことをおっしゃいます。私が盗みました——でもその壺は私の物です」…

「さあ、持って行きなさい」と彼は、その曲線を描くアヨーディアの青い壺を、アジザンと共に追い払うかのように彼女に突っ返して言った。「シムラから帰ったら、僕が調査する。もし君の言うことが本当だったら——」彼は、ダレル・ベグと乗馬用のムチを思い出すとこみ上げる怒りを抑えるために、口をつぐんだ。よくもそんな恥知らずな

企みに巻き込むかのように、その壺をグエンに送りつけたものだ…

「それが総てです」とアジザンは言いながら、立ち去ろうとした。「でも、旦那様はお怒りになってはいけません。その壺は、この奴隷の私のものです」

「怒るだって？」と彼は横柄ながらも、思いやりを込めて、彼女の言葉を繰り返した。

「どうして、僕が君に腹を立てなきゃいけないんだ。誰でも自分の所有物に対する権利があるんだよ。さあ、君はそれを手に入れた。家へ帰って元気になるように。僕の可愛いアジザン、さようなら！」

「ごきげんよう、さようなら、旦那様」(176-77)

### III

アジザンから「青い壺」をめぐる陰謀を示唆されたものの、ホッジナガルから保養に来たジョージにとって、シムラはこの世の天国のように感じられた。そこで、彼は仕事を忘れて同胞たちと昼間はテニスやピクニック、夜は午前3時までパーティーに夢中になる。どれほど散財したのか彼の記憶にないのも、町の商店街には社交界にデビューするための衣料品や僻地にはない甘菓子が並び、それらを何度も衝動買いしたからである。シムラの社交界に出入りしていたグエンは、宝石付きのドレスを纏っていた。彼女のエレガントな身なりやマナーは、イギリス人男性ばかりか、避暑にやって来たダレル・ベグも魅了する。彼女がルイス・ゴードンとダン・フィッツジェラルドの財力と将来性を天秤にかけて、どちらかとの結婚を期待しているとは、誰にも想像できなかった。もっとも、ジョージには、年下で財力のない自分は彼女の再婚相手にふさわしくないという意識はあった。しかしグエンを「理想の女性」と感じてしまった彼は、社交界で付き合いを重ねるうちに、彼女への思いを深めてしまう。そのために、彼は愚かにも大切な「水門の鍵」の一時的な隠し場所として、彼女の乗る駕籠 (*dandy*) のクッションの下を選んでしまう。ジョージの手元を離れた鍵は、グエンが別荘へ帰る道中で、同行したダレル・ベグに目撃されるものの、娯楽の溢れる避暑地で気が緩むのか、ルイスもローズもそれを気にも留めなかった。

「水門の鍵」がダレル・ベグの垂涎的であることは、「青い壺」の追加注文を取りに宮殿からの使い (*Vakeer*) を送られたグエンには、察することができた。しかし、自分が「宝石」を横取りして、換金したことをダレル・ベグに知られていると恐れた彼女は、道中でルイスから鍵の管理を任せられたにもかかわらず、ドレスの仕立て屋に立ち寄った際に、故意にそれを駕籠の中に放置する。そのチャンスに乗じたダレル・ベグは、鍵を一時的に持ち出して合鍵を作る。<sup>10)</sup> あいにく、ジョージはグエンが別荘に帰る前に彼女の駕籠に追いついて、鍵を取り戻したのでそのような彼女の裏切り行為を知ることができなかった。グエンにしても、万一ホッジナガルの水門が開けられても、過去の例を振り返れば、シムラにいるジョージが責任を負うことはないように思えた。とはいえ、彼が休暇を早めに切り上げてホッジナ

10) ダレル・ベグがグエンの駕籠から水門の鍵を盗み出す場面は、描かれていないが、水門の合鍵が作られるチャンスは他にない。(陰謀にまつわる登場人物の対話は、読者の想像力を掻き立てるためか、その殆どが具体的に語られぬ内緒話である。)



ガルへ帰ることを伝えられた彼女は、俄かにジョージに降りかかりそうな災難が心配になり、鍵の放置の件は伏せて、「青い壺」に秘められた「宝石」を横取りした件だけを彼に告白する。

そのグエンの告白は、彼女への百年の恋も醒めるような内容であり、ズーブルザマン一族の陰謀を明らかにするものであった。しかし、「私は何故そんな事をしてしまったのか」

(214)と涙を流す彼女に同情した彼は、上司のルイスに一連の経緯を報告することを躊躇し、「宝石」の売買を隠蔽するためにマノハル・ラルのもとへ急行する。首尾よく彼を買収してダイヤモンドの取引証書を捏造させたジョージは、それをグエンに郵送して彼女を安心させる。彼女が6,000ルピーを得たとしても、その証書があればホッジナガルの「宝石」の売買はなかったことにできるはずだった。

しかし、「宝石」作戦を頓挫させられたズーブルザマン一族が、別の手段を講じることは十分予測できた。とりあえず、水門の錠前の鍵を新たなものに付け替えることが得策だった。そこでジョージは、ホッジナガルへの近道の砂漠を横断し、「赤いバンガロー」の官舎へたどり着く。意外にも、そこで彼を待ち受けていたのは、料理人が作った暖かい食事ではなく、コレラの流行によって死亡した使用人たちの死骸だった。砂漠の旅と疫病騒ぎによって疲労困憊した彼は、水門の錠を付け替えることを後回にして、ウィスキーをあおって寝込んでしまう。折りしもその晩、何者かが水門番が持ち場を離れた隙をついて水門を開け、干からびているべき支水路や川に水が流れ出す。それは錠前を開ける鍵がない限り、不可能な作業だった。翌朝、ジョージは予期せぬ事態を目撃して慌てて自分の鍵をポケットから取り出し、それに付着していたワックスの破片に気づいて、いつの間にか合鍵が作られていたことを悟る。どう考えても、彼には水門を開けた合鍵は、ダレル・ベグが彼のマスター・キーを盗み出して作らせたものか、あるいは脅迫されたグエンが、預かったマスター・キーを彼に渡して作られたものか、分からなかった。いずれにしても、グエンは合鍵が宮殿側によって作られたことを察知したために、自分をシムラに引き止めたのではないか。そうこう思い悩むうちに、彼は使用人が取り返したダンのペンダント・ロケットの中にグエンの写真を発見し、二人の仲に気がつかなかった自分の愚かな行動を後悔する。そもそも彼がグエンに魂を奪われなければ、「青い壺」が彼女に渡ることもなく、マスター・キーが持ち出されることもなかった。また、水門を守るためには、たとえグエンに泣きつかれても、一連の経緯をすべてルイスに報告するべきであった。後悔の念にかられたジョージは、誰よりも自分が責任を負うべきだという気持ちになる。確かにグエンに裏切られた気持ちも否めないが、彼女もダンも彼にとっては大切な友人であった。そのために、ズーブルザマンの手下によって水門を開けられたことが報告されて、「宝石」にまつわるグエンやダンの不正行為が発覚するのは何とか防がなくてはならない。二人の将来を台無しにするわけにはいかなかった。そうこう思い悩んだ彼は、「宝石」の件を闇に葬ろうと、あえて拳銃自殺をする道を選ぶ：

ズーブルザマンが仕組んだんだ。試合は終わってしまった…でも何でこんな負け戦になったんだろう…

彼が目にした「鍵」の内側の表面に付いていたものは、銀色の水流が砂漠の世界を

変えたように、瞬く間に一大変化を彼にもたらした。それは、単純な物だった。一片のワックスだった…彼はすっかり気落ちして、組んだ腕の中へ頭を沈めた…

——ところでダンから盗まれて、あのおしゃべりの愚かな使用人が盗人から取り返して持って来たものは何だろう。ジョージの右手は震えながら、細い金の鎖についていた素朴な金のロケットを取ろうとテーブルの上に差し出された…そのロケットは彼の指から落下して開いた。それは彼の愛した女性、すなわちダンが愛した女性だった…

彼女をスキャンダルの気配から救うためなら、非難されることを厭わないつもりだった。しかし、それはダンの将来を危険に晒すことなしにできるのか。だめだ！もし最悪の事態になったら、もし取るべき方法がなかったら——いやきっと何か方法がある。すべて責任を自分の肩に負う何か簡単な方法が。それからアジザンは、勇敢に違いない。彼女が真実を証言して、ダンが愛したこの女性、グエンを救うに違いない。(230-32)

「白人の責務」を果たしそこなつたとはいえ、「鍵」を放置したり恋人のグエンを庇つた以外に責任がないジョージの自殺は、出版当時の読者にどのように捉えられたであろうか。キプリングの物語を知る読者にとっては、ジョージのようにインド人に出し抜かれたり、放埒なメモサーヒブに振り回されるようなイギリス人は、珍しい存在ではなかった。また、酒や女遊びにふけて身を滅ぼしたり、孤独で劣悪な環境下で身体や精神に異常をきたして自殺するイギリス人も、アングロ・インディアン小説には度々登場する。これらを考慮すれば、ジョージが自殺を選んだとしても、さほど不自然な成り行きではないと言える。また、「男らしさ」や「リーダーシップ」をモットーにする帝国主義者からすれば、私情を優先した彼は「失格者」かもしれないが、フェミニストには、アジザンを思いやる彼は優しく善良な人間として感じられたであろう。いずれにしても、19世紀末のイギリスの読者の目には、彼の自殺の原因を作ったチャンドニヤズブルザマン、ダレル・ベグは少なからず悪党に映ったに違いない。また彼らの共犯者とは言えないにしても、「白人の責務」担う官吏を次々に籠絡したり、「宝石」を横取りしてメモサーヒブの体面を汚したグエンは、いわゆる「帝国を破壊する女」の典型に思われたのではないか。これらの人物が罰せられない『陶工の親指』の顛末は読者には——帝国主義やフェミニズムへの志向に関わらず——後味の悪いものであったに違いない。もっとも、作者はそのような感想を意識して、本筋とはあまり関係ないようなエピソードを盛り込んで、それぞれの悪役に対する情状酌量を読者に促しているように感じられる。中でもグエンが公共事業局のホッジナガルへの視察に同行した折に一行とはぐれてジャングルをさ迷ったり、野営地のテント火事で命を落としそうになる場面には、いかにしたたかなメモサーヒブであろうと、インドでは死と隣り合わせのような生活を強いられることを窺わせるもので、実際にインドで様々な危険に遭遇した作者自身の体験が投影されている。<sup>11)</sup> また、ズブルザマンたちの陰謀は確かに犯罪的行為ではあるものの、帝国政

11) 作者は、夫の仕事に同行してサソリやムカデの出るテント暮らしを余儀なくされたり、ジャングル道を馬で走行中にヒョウに襲われたりもした。また、ジョージの罹患したジャングル熱（パンジャブ熱）は、夫婦共々、何度も体験したという。Violet Powell, *Flora Annie Steel: Novelist of India* (London: Hinemann, 1981) 12-19 参照。

府が管理する近代的な用水路の多くは、ムガル帝国時代以前に作られた原始的な水路を土台に修理・改築されたものであるため、イギリス人に奪われた取水権を取り戻したい彼らの心情も理解できる。さらに用水路の修復や建設資金に関しては、イギリス本国で集められたとはいえ、これらの多くに、インドから吸い上げた税金や商業上の利益が当てられたことを忘れてはならない。物語の中で、ダレル・ベグが公共事業局の官吏に対して、馴れ馴れしい態度を取るのには、これらの事情を反映しているように思われる。ちなみに、19世紀末において帝国政府が灌漑政策よりも収益の上がる鉄道建設を優先し、それが旱魃による大飢饉に繋がったというインド人側からの批判も無視できない。<sup>12)</sup> 作者が帝国政府の灌漑政策に関してどのような政治・経済的な見解をもっていたかは定かではないが、少なくとも用水路をめぐる問題に関して『陶工の親指』は、イギリス人の灌漑事業を称える『縁の下の力持ち』（*The Unsung*）とは異なり、<sup>13)</sup> インド人読者の気持ちを配慮した作品といえる。物語の後半で、ルイスやローズが事件の核心に迫りながら、詳細は不明のまま誰も厳しく咎められず、イギリス人——インド人双方に和解がもたらされる幕切れは、帝国支配に関する様々な問題を意識しながらも、その安泰を願った作者の心情の表れと言えよう。

#### IV

ジョージの自殺と前後して、モンスーンの到来を告げる大雨が降り始め、大洪水の警報を受けた公共事業局がホッジナガルの堤防の決壊を恐れて、ダンに水門を開けるように命じるのは、彼の死を無駄にするような何とも皮肉な事だった。ラージプルから現場に急行したダンは、大雨に先立って水門の錠前が合鍵を使った何者かによって開けられ、バンガローの中でジョージが拳銃自殺をしているのを発見する。最初は、彼の自殺の原因が分からなかったものの、テーブルの上に置かれたペンダント・ロケットと、付け替え用の水門の錠と鍵に気づいたダンは、自分とグエンを守るためにジョージが自殺したことを悟って、少なからぬ衝撃を受ける。もうほんの少し早く自分がホッジナガルに到着していれば、ジョージの自殺は食い止められたに違いない。何とか時間のズレを取り繕えば、事前に水門が開いたことは秘密にできそうだった。そう思うと、ジョージの死はこの上なく痛ましい。しかし、事態を正直に報告すれば、ジョージばかりではなく公共事業局にとっても不名誉な話だった。そこでダンは、ちょうど当地を襲ったコレラや、大洪水の混乱を利用して、作り話をするを思いつく。ジョージの亡骸を目撃したバンガローの使用人たちには、口止め料さえ払えば済むことだった。そこでダンは「命令されたとおり、水門を開けたので、サンオウリー堤防は無事。しかし宮殿は被害を受ける。ジョージ・キーンは、昨日コレラで死亡。当地でそれは大流行している。詳細は郵便で」（247）という電信をルイスに送る。それを受け取ったルイ

12) このような見解については、Ramesh Dutt, *The Economic History of India in the Victorian Age: from the Accession of Queen Victoria in 1837 to the Commencement of the Twentieth Century*, 3rd ed. (London: Kegan Paul, 1908) 173-74 参照。

13) Maud Diver, *The Unsung: A Record of British Services in India* (London: William Blackwood & Sons, 1945) 216-29 参照。

スは、間もなく水門の開いたタイミングが早すぎたことを悟り、本局に戻ったダンを問い詰め、水門が破られた経緯を隠蔽するためにジョージが自殺したことを知る。それは、密かにグエンに求愛していたルイスにとっても、衝撃的な事件であった。なるほど副長官の身としては、一連の出来事を解明することが正義だったが、同胞の不正を暴いて公共事業局の体面を汚したくはなかった。そのため、彼はダンの作り話を採用して、真実を闇に葬ることにする。

その真実を探るきっかけをアジザンが作るのは、作者のジョージに対する弔いの気持ちの表れであろうか。「青い壺」は引き取っても、アジザンは更なる陰謀にジョージが巻き込まれることを心配して、自分が16年前に亡くなった陶工の娘の幽霊だという巷の噂に乗じて夜の町を歩き回り、ズーブルザマン一派の動きを探るうちに、陶工からジョージが亡くなったことを知らされる。自分を実の娘だと錯覚するような彼の話が信じられないアジザンは、赤いバンガローに向かうが、途中で用水路から水が流れ出しているのを発見する。不可解な水流に洪水の気配を感じたバザールの人々の間には、不穏な空気が漂っていた。安否不明のジョージを探すうちに、使用人の噂話からジョージが自殺したことを知った彼女は、絶望の淵に追いやられる。水門が開けられたのも、ジョージが亡くなったのも、「青い壺」を使った宮殿側の陰謀のためだと悟った彼女は、彼の仇を討つために、短剣を持ってズーブルザマンの部屋へ忍び込む。しかし、短剣を振りかざすにも関わらず、ズーブルザマンは動じる様子もなく、アジザンにジョージへの恋愛が片思いであることを指摘したり、自分が祖父であることなどを告げる。彼の言葉に真意を感じた彼女は殺意を失うが、余命いくばくもないこともあって、ズーブルザマンの避難勧告に従わず、宮殿から脱出することを拒否し、彼と共に大洪水に流される：

…「わしが、イギリスの旦那様を殺したんじゃない、愚か者。彼はあのイギリスのご婦人を愛していたから自殺したんだ。壺を手にしたあの美しいご婦人を」

その少女は一步下がり、鋭い痛みの金切り声をあげながら、短剣を持った手を自分の額のところへ持ち上げた。それは的を射る言葉だった。しかし、彼女は必死に否定しようとした。

「お前は嘘をついてる！ あの女が壺を取ったんじゃない。私が一度——いや二度持ち去った。真珠は私が持っている——ホッジナガルの真珠を。私——私だ——あの女じゃない」…

「そうか！ お前にも知恵があるんだな。『手綱をもつ近頃の女』というやつか。わしの息子や孫のダレル・ベグは能無しだ。お前に知恵があると知ってさえいたら、わたしはお前を孫娘として扱うはずだった。お前は今、自分の身分を知ったかもしれないが」…

「お前が誰であろうと、私はお前を殺す」と彼女は、間をおかずに叫んだ。

「何故だ。わしがお前にどんな害を及ぼしたというんだ、アジザン。あのイギリスの旦那様がお前の顔を気に入ったなら、わたしはお前に殺されがいがあろう。お前には見初められるチャンスがあったんだがな」…

「なぜ門をはずして戸を開けなかったんだ、愚か者め」。それは、静まりかえった中で、その少女によく聞こえる言葉だった。

「なぜなら、私はそれを選ばなかったからだ」

「女の理屈なんだな。なぜ戸を開けることを選ばなかった、アジザン？」

彼の声の調子には、怒りや不安さえも殆どなかった。彼は女の流儀には通じていた。

その少女の顔は、彼が生き延びる見込みのないことを告げた…

宮殿の一角が姿を消すまで、雨足が弱まるにつれ夜は深まっていった。宮殿を見守る数人の人々は、その塔が陥落する激しい音だけを聞いた。(240-43)

大洪水に乗じてズーブルザマンと心中するアジザンが、アングロ・インディアン小説に度々登場するインド女性のステレオタイプ、即ち、激情にかられやすく、白人男性のために身を捧げる属性をもつことは否定できない。しかし、ズーブルザマンが指摘するように「知恵がある」とか、祖父である彼の命令に逆らって自らの運命を「選ぶ」彼女には、「手綱をもつ近頃の女」、すなわち主体性をもつ近代的なフェミニスト像も投影されている。実際にはゼナナに生まれ育って、「手綱をもつ近頃の女」にはなれなかったものの、アジザンが自らの意志を貫いて最期まで抱きしめていた「青い壺」は、彼女の亡骸と共に発見した陶工によって公共事業局のメンバーのもとに運ばれ、ジョージが賄賂を受け取らなかった究極的な証拠とされる。その後アジザンとジョージの墓は、用水路を隔てた別々の場所に作られるものの、アジザンがジョージを思う気持ちは報われたことになる。

## V

アジザンが、善意と恋愛感情によってジョージの名誉を回復した一方、チャンドニが一連の陰謀を明かす動機は、損得勘定とグエンへの対抗心によるものだった。グエンに届けられなかったはずの「青い壺」が、大洪水による宮殿の損壊やズーブルザマンの死によって、行方不明になったことにあわてたチャンドニは、国宝の「宝石」を失くしたり、大雨に先立って水門を開けさせてホッジナガルを水浸しにした責任を、新しい領主となったズーブルザマンの息子クシュ・ハル (Khush-hâl) から問われることを恐れて町からラクダに乗って逃げ出す。彼女が頼るべき人物は、シムラに滞在中のダレル・ベグだった。しかし彼がヨーロッパかぶれのためか、ユーラシアン (欧亜混血) の少女ベアトリス (Beatrice) を妻にしたために、チャンドニは彼のもとからすげなく追い払われる。ありふれた三角関係ならば、修羅場になりそうなものの、「ヴェールをかぶって、ゼナナで大勢の女たちと暮らすために馬鹿者と結婚する予定はなかった」(254) 彼女は、ベアトリスに嫉妬の念を抱かなかった。それどころか、ユーラシアンは、インド人、イギリス人双方から差別される存在だったので、ダレル・ベグとベアトリスの結婚を滑稽に思う。それぞれの宗教上の問題や周囲からの軽蔑も念頭にない二人は、愚か者にすぎない。一方、チャンドニには、ダレル・ベグにはない機動力や精神力、知恵があった。大半のインド女性は無学なのに、彼女にはコタ (Kotha) で身に

付けた芸や教養、マナーがあった。<sup>14)</sup> また上流階級と付き合いしてきた彼女は、政治的な能力があるばかりか、間諜を雇ったり、イギリス人に仕える使用人を買取る財力や人脈もあった。チャンドニにしてみれば、ベアトリスや混血の私生児を生んだ彼女の母親リリー（Lily）よりも自分の方が一枚上手だという気持ちがあった。ダレル・ベグの家来モハメッド（Mohammed）が彼女を力づくで追い返さないのが、何よりも彼女のようなノーチ・ガールが、インドの民衆から一目置かれる身分であったことを物語っている：

「ああ、あんたなの、モハメッド。この女、私を階段から突き落とすって言うてるのよ。ちょっと小娘ちゃん、実力となったら、どっちがダレル・ベグ様をものにするか、私には分かってるわよ。でも、こんな風に彼のためにケンカするのはやめとくよ。それほど価値のある男じゃないよ。そうか、彼はあんたを気に入ったのか。可愛そうな男！あんたの母親は、混血のあんたよりましに違いない」

「さあ、さあ、チャンドニさん」とその下僕は、リリーの金切り声の命令に従って促した。「ここはもう、あなたの居る場所ではありませんよ。この人たちは奥方ですよ。ベグ様はベアトリス様と結婚されたのです」彼は早口の低い声で言った。「そうです。結婚の誓いがされてしまったんですよ。だから罵っても無駄ですよ。さあ、さあ、ベグ様とはどこか他の場所で会えますよ。お帰り下さい」

「いいえ！ここで彼と会う——ここで奥方と一緒にいる彼と」とチャンドニは現実を無視して答えた。「あんたの下僕に、高級娼婦のチャンドニが何者で、どんな存在だったか、そうだ！もし、その気になったら何者になるか聞いてよ」（258）

ダレル・ベグとベアトリスの結婚はさておき、チャンドニにとってズーブルザマンから譲られることになっていた「宝石」も得られず、ホッジナガルの水門を開かせた成功報酬も受け取れないのは心外であった。町は水浸しになっても南向きに水が流れれば、ダレル・ベグは密約どおり、溢流灌漑に頼る南方のラージャから謝礼金をもらうのに、<sup>15)</sup> チャンドニはその分け前に預かれそうもなかった。ダレル・ベグから謝礼金を取り損なった彼女は、腹立ち紛れに「青い壺」を持っている可能性のあるメムサーヒブを脅迫して、「宝石」あるいは口止め料を取ろうと、グエンが滞在していたシムラにあるティーデー大佐の別荘を訪れる。

イギリス人官吏の住まいに、見知らぬインド人は容易に足を踏み入れられないものの、輿（*dhooli*）に載って到来した「白い衣装に身を包んだ人物」を高貴なインド女性と思いついたグエンは、警戒心を抱かず彼女を部屋に通す。ところが、それは麝香と竜涎香の匂いを漂わすノーチ・ガールのチャンドニだった。グエンにとって、娼婦もどきのインド女が、悪び

14) 北西インドのノーチ・ガール（タワイーフ）は、コタ（*Kotba*）と呼ばれる養成所で舞踏（*Katbak*）や読み書き、教養、マナー等を修得した。ムガル帝国時代には、礼儀作法を学ばせるために、息子をコタへ通わせた皇帝や領主もあったと言われる。Veena Talwar Oldenburg, "Lifestyle as Resistance: The Case of the Courtesans of Lucknow, India" *Feminist Studies*, Vol. 16, No. 2 (1990) 268-71; Neville, *op.cit.*, 3-6 参照。

15) パンジャブの灌漑は、雨季に河川の岸を切って氾濫した土地の先の耕作地に水を導く習慣があった。ホッジナガルを水浸しにして、南方のラージャの土地を潤すというエピソードは、この伝統に基づいている。多田、前掲書、158頁 参照。

れることもなく自分に面会を求めるのは不測の事態であったが、<sup>16)</sup> 好奇心もあって用件を聞く。その内容は、グエンが横取りした「宝石」を返すか、その代金を払えという脅迫であり、彼女に衝撃を与えるが、プライドの高いグエンは開き直って「宝石」の件に関してはどこまでも白を切り、チャンドニの横柄な態度に怒りの表情を取り繕って追い返そうとする。しかしそのようなグエンの高飛車な態度も、百戦錬磨のチャンドニの嘲笑や敵愾心を買うばかりで、二人はつかみ合いの喧嘩になる。

その騒ぎに気づいたローズは、グエンを守ろうとチャンドニに応戦するが、口論するうちにチャンドニの言い分に幾分なりとも信憑性を感じる。一度は手にした「青い壺」が二重底のようになっていたことを思い出したローズには、そこにチャンドニが「宝石」を忍ばせたという話も、全くの作り事のように思えなかった。またジョージの描いた絵の中には、確かに「青い壺」を持った少女(アジザン)がいた。ローズは、その少女が壺を取りに自分のもとを訪れたのは夢だと思い込んでいたが、現実だったと悟り、チャンドニが再びその壺の中に「宝石」を仕込んだというもあり得ない話ではないと感じた。グエンの主張——「青い壺」の往来はアジザンとチャンドニを含むインド人側だけの取り合いだった——としたならば、水門の合鍵が作られたり、ジョージが自殺するのは理屈に合わない。それにしても「宝石」やアジザンは何処に行ったのか。しかしローズはそれ以上、事の真偽を詮索するわけにもいかず、ひとまず力づくでチャンドニを追い出す：

「私は、デリーのチャンドニです。イギリスの旦那様がアヨーディアの壺から取り出したホッジナガルの家宝の真珠が欲しいんです」

「お前が何のことを言っているのか、分からない」と彼女は無頓着に言った…

「お前はよくもここに來たわね。すぐに出て行きなさい！ ヴェールを被って顔を隠して出て行きなさい！ 無礼者！ 恥知らず！」…

「ローズ、その女と話をしないで、私がすべて話すわ。その話は全部うそよ。ホッジナガルでその壺が盗まれた後で、シムラにいた私に送られ、私がそれを送り返したというのはデマで真実じゃないわ。私は決して——」…

「それからどうなったって？」と、ついにその高級娼婦のチャンドニは、かなりむっつりしてローズの言葉を繰り返した。「もしローズ様が壺を送り返したなら、私に分かるわけがありませんよ。ただ私は、シムラにお立ちになる日に、ジョージ様の所へ壺が渡ったことは知ってます。彼がその壺を誰かにあげたのです。その誰かに答えてもらいましょう。それが誰なのか、私は気にしませんよ。ただ私は、壺の中に隠された真珠の

16) チャンドニのイギリス人に対する横柄な態度については、次のネヴィルの指摘が参考になる。

デリーの陥落後、文化の中心となったラックナウのタワイフは、北インドのプロのノーチ・ガールの紛れもない代表だった。素晴らしい踊りや歌、観客の好奇心をそそる才能によって名声や威厳を得たタワイフと接触をもつことは、社会的地位を示すものだと考えられた。パトロンとタワイフの性的関係は、彼女を墮落した女のカテゴリーに貶めなかった。一般的に、タワイフは生涯、あるいは一定期間だけ、一人のパトロンについて、同時に別のパトロンに対して契約をしなかったが、前のパトロンが亡くなれば、そういうこともあった。これらの関係は、決してパトロンの家庭の調和を乱すものではなかった。タワイフの家で夜を過ごすことは、その人物のプライドを高め、その地位や財力の指標となった。Neville, *op. cit.*, 109.

持ち主です」

「真珠ですって！ 私の所へ「青い壺」が送られた時には真珠なんて入ってなかったわ」とローズは即座に叫んだが、その中の隅がギザギザだったことを思い出してグエンの方を向いた。「あなたは、その壺を手にした時に二重底のようなものに気づいた？」ローズが覗き込んだグエンの顔は青ざめた…

「この絵は誰を描いた絵なの？」ローズは無頓着に繰り返した。チャンドニの含み笑いとグエンのしかめっ面にかまわず、絵の方を向いた。「絵の中のあなたが喋ってこの二人に恥ずかしい思いをさせたらどうかしら。あなたが真実を知っているように見えるわ」…

チャンドニは笑いながら答えた。「絵の少女はジョージ様の別のお友達ですよ。ローズ様は本当のことをおっしゃいました。ここに三人がいます。どなたが真珠を返してジョージ様を救うのですか」

「何から救うっていうの」とローズは叫んだ…

「旦那様たちの誠実さが見せかけだけで、友人をもつのも、その友人のために「宝石」を横取りし、公務に忠実ではないという恥ですよ。どうしてそんなことになったかグエン様に聞きなさいよ。水門の合鍵を送って、用水路の水が——」… (268-73)

グエンやローズがチャンドニを「無礼者」とか「恥知らず」といって蔑むのは、19世紀末においては反ノーチ法の影響もあり、一般的なメムサーヒブの目にはいかになるノーチ・ガールも娼婦にしか映らなかった背景がある。彼女たちは、かつてエミリー・エデン (Emily Eden, 1797-1869) が魅せられたようなノーチ (踊り) を見る機会も殆どなく、ノーチ・ガールを「舞踊家」として評価できなかった。<sup>17)</sup> ノーチ・ガールは、帝国を支配するイギリス男性の精神と肉体を墮落させる危険な存在と見なされ、メムサーヒブの住居に侵入することは許されなかった。しかし、あえて対面してみればノーチ・ガールのチャンドニが英語を理解し、自分たちの「不誠実」を理路整然と批判することは脅威だった。白いブルカで身を包んで輿に乗るノーチ・ガールは、イギリス人の家庭に侵入することもできれば、帝国支配者の威厳を損なうような噂を広めることもできる恐るべき存在である。大多数の文盲のインド女性とは異なり、ノーチ・ガールのチャンドニが読み書きできるなら、その可能性は全く否定できない。彼女を放置しては、「宝石」を賄賂として受け取ったジョージが、合鍵を作らせたために水門が不用意に開けられ、大洪水が起きた責任を取って自殺したというような噂が広まるのは確実だった。

チャンドニの話半信半疑に聞いたローズではあったが、ジョージの名誉のために真実を確かめたくなり、ルイスを訪れて自分がチャンドニのもとへ出向いて事の真相を見極めると言い出す。しかし、彼にとって、公共事業局長官の娘とはいえ、ローズが自分たち官吏の

17) インドラニ・センは、10人のメムサーヒブ作家について、彼女たちがノーチ・ガールに対して魅惑と嫌悪の入り混じった感情を抱いたことを指摘している。Indrani Sen (ed.) *Memsabibs' Writings: Colonial Narratives on Indian Women* (New Delhi: Orient Longman, 2008) 1-16 参照。



仕事に口を出すことは、困りものだった。できればダンの作り話のように、ジョージはコレラで亡くなり、水門は堤防を守るために開けられたことにしたかった。またローズがバザールのチャンドニの住まいを訪れることは、危険とまでは言えないにしても、メムサーヒブとして好ましい行為ではなかった。しかし、彼女のお役所のご都合主義を許さない強い正義感と、自分への信頼や「愛」に感銘したルイスは、ローズに代わって「宝石」の件を解決するためにチャンドニのもとを訪れる。

## VI

チャンドニはシムラのバザールに滞在するとはいえ、階上にあるその住まいは別世界のように綺麗だった。そこでルイスは初めて、彼女が下の階に住む街娼とは異なる存在だということを知り、かつて、ノーチ・ガールの中にはムガル皇帝の王妃になった人物や、<sup>18)</sup> 一国の支配者になってイギリス軍に刃を向けたベガム・サムル (Begum Samru, 1753-1836年) もあったことを想起すれば、<sup>19)</sup> チャンドニのようなインド女性が存在するのも不思議ではない。しかし、19世紀後半のヴィクトリア朝の価値基準しか持ち合わせないルイスには、ノーチ・ガールはよく理解できない御し難い存在だった。一方、上流階級の男たちの接待に慣れているチャンドニは、イギリス人官吏のルイスの到来に全く怯むことなく、彼を客人として優雅な態度で出迎え、赤面させる。しかし、100ルピー札を差し出され、「真実」を語ることを要求された彼女は、俄かにしたたかな性格を露にし、キンマ (betel) の葉を噛みながら、ローズに話した内容を遠慮なく繰り返す。彼女によれば、ジョージの絵の中のアジザンは、宮殿に住む高貴な身分の少女だという。とすれば、「宝石」の件に関してはインド人側だけの奪い合いだというグエンの説は、ありそうもない話だった。筋の通った才気を感じさせるチャンドニの話は、ルイスにとって論駁の余地がなかった。同胞の名誉を守るためには、現金ではなく、「宝石」が欲しいという彼女の要求を聞き入れるしか方法がないことを悟り、彼はバザールから退散する。

チャンドニの口封じのために「宝石」を発見すること不可欠だと悟ったルイスは、早速グエンのもとを訪れ、彼女にも真実を語るように要求する。しかし、ジョージが自殺したことを告げれば、彼女を傷つけると思った彼がその事実を伏せたために、グエンは「宝石」を横取りした件を告白するどころか、ローズの気持ちを優先してチャンドニのもとを訪れたルイスに怒る有様だった：

「もし、あなたが私の所へ先に来たなら、ルイス」と怒って声を震わせながら話を

18) 例えば、8代皇帝のジャハーンダール・シャー (Jahandar Shah, 1661-1713年) や、12代皇帝のモハメド・シャー・ランギーラ (Mohammad Shah Rangila, 1702-48年) はノーチ・ガールを妃にした。とりわけ、前者の妃ラル・クンワール (Lal Kunwar) は歴史に名を残した女性である。Nevile, *op. cit.*, 19 参照。

19) ベガム・サナルはカシミール出身のノーチ・ガールで、ヨーロッパ男性と結婚してメラート近くのサルドハナ藩王国の支配者となった。彼女の伝記については、Preeti Sharma, *Begum Samru: Her Life and Legacy* (Delhi: Academic Excellence, 2009) 参照。

遮った。「私は、あなたがローズ・ツイーディーの命令でドンキ・ホーテのような真似をして時間を無駄にしないように警告したでしょうに、その女、チャンドニはペテン師で、そういう種類の人間として扱われるべきよ。彼女の嘘がそんなに注目されることになるなら、私は昨日、警察に彼女を追いかけさせたわよ。あなたが、さっきその女に会い行ったなんて！ 馬鹿馬鹿しすぎる——怒りが収まらないわよ！ すべては、ローズがあなたに泣きつきに行ったせいね。彼女の恋人のために、ジョージが彼女の恋人だったのね！…」

「ツイーディー嬢が、恋人のために声を上げたんじゃないことは、確かだよ」とルイスは、問題にされた若いローズが、共感よりも非難を喚起したことを感じながら話を始めた。「僕は、君に関するそんな話を放置できなかった」

「だからあなたは、また彼女たちの話を聞いたのね」とグエンは返答した。

グレンは、故意に激昂して言った。「バザールの下品な女が私について言った話を、あなたが聞いたっていうなら、…私は嵐の晩以来、「青い壺」を見ていない。だから、ローズが自分のもとへそれが送られ、内緒で送り返したって告白したんだから、私は彼女よりも、その壺には無関係だよ。彼女はあなたにそれを言ったの？ あなたは、ローズにも真実を告げるように要求したの。私だけがあのバザールの女と同様に、尋問されるのかしら？」(286-87)

ローズとグエンが「宝石」の件をめぐる反目することは、「どちらの女性も助けたい」ルイスを悩ませる。どちらかの意見をたてれば、えこひいきと言われかねなかった。そこで、ルイスは事態を收拾するために、ダンを交えた話し合いにグエンとローズを同席させる。その四人の会合で、ルイスは最終的に、長官のツイーディー大佐の前でチャンドニも呼んで公の審判を関係者一同に受けることを提案する。それは、無論グエンにとって気の進まぬ話であった。しかし、自分を愛するダンが「宝石」をデリーに運んだ件に関して沈黙を守るという確信があったため、彼女は同意する。

ところがジョージの最後の願いがかなうかのように、四人の話し合いの場に、アジザンが持っていた「青い壺」を返しに陶工が訪れ、彼の親指が滑って割れたその壺の中から「宝石」が転がり出る。四人は、それをジョージが賄賂を受け取らなかった証拠と見なし、安堵感を覚える。しかし、興奮したローズの独り言からジョージが自殺したことを知ったグエンは、ショックのあまり気絶してしまう。「青い壺」の中の「宝石」は、自分の無実を証明できそうだったが、グエンはジョージを自殺に追いやった罪の意識からは逃れられなかった。そんな彼女の様子や、収賄とは無関係に思われたジョージの自殺を改めて不可解に感じたローズやルイスは、チャンドニが言う「青い壺」に「宝石」を二度仕込んだという話に、多少なりとも信憑性を抱くようになる。そこで、ダンは自分とグエンが密かに婚約していた事実を公表し、ジョージが二人を庇うために自殺したことを公にする。ルイスは憤りを感じながらも、ツイーディー大佐に事情を話して、公の審問会を撤回する。そして、ダンに口止め料の3,000ルピーと「宝石」をチャンドニのもとへ届けさせて、再び事件を闇に葬る決心を

する。

多額の口止め料に満足したチャンドニは一連の事件を表沙汰にしないことを約束し、ダンの期待どおり「水門の鍵」は、彼女がジョージの寝ている間に盗み出したという証文を書いて彼に渡す。無論、証文の内容が真実でないことは、ルイスにもローズにも察しがついた。しかし、それでジョージとグエンの名誉は守られることになったために、二人はその件を不問に付す。それにしても、ジョージの自殺に責任を感じ、公共事業局にいづらなくなったダンには、オーストラリアに職を得て、グエンを伴って旅立つことを決心する。二人の結婚と新たな旅立ちは、公共事業局のメンバーにとっては、歓迎すべきニュースだった。ローズは、一度は陰悪な仲になったグエンのために、結婚式の準備を手伝い、ルイスはダンのベスト・マン（花婿の付添い人）を引き受けることになる。しかし、ダンが結婚式の前夜祭で飲みすぎたためか、用水路わきのプールに水がないことを確認せずに泳ごうと飛び込んで命を失う。

ダンの思いもよらぬ事故死には、メムサーヒブの体面を汚したグエンのハッピーエンドを故意に妨げる作者の意図が感じられる。それにしても、グエン自身が抹殺されず、2年後にはツイーディー大佐の後妻に納まったり、神智学を唱えたブラヴァツキー夫人 (Madam Blavatsky) の「半信半疑」の弟子になって、以前の生活を改めた運命論者になるというプロットが展開されるのは、「結婚」以外にメムサーヒブの体面を保つ生活ができない彼女の立場に、作者自身の姿を重ね合わせた同情心からだろうか。男女関係という観点からは、およそ厳格でロマンチックな感傷をもたなかったスティール夫人が、最終的にはグエンに寛容であるのは、教育視察官に任命された彼女が、サファイアの指輪をインド人の高官から贈られた体験から、<sup>20)</sup> 収賄をタブーとしながらも、イギリス人がインドの誘惑に嵌められやすいことを理解できた故であろう。グエンとダンの結婚前夜に、ローズがチャンドニに妥協したルイスのプロポーズを受け入れるのも、現代的な観点からは、取ってつけたようなエピソードという感想を否めないが、アングロ・インディアン社会、即ちインド帝国支配の存続という意味においては、納得されるべきプロットの展開であろう。かつては、父親のツイーディー大佐やルイスのアドバイスに逆らって羽目はずしたローズは正に、女性教育視察官として当局の方針を批判して、夫を左遷の憂き目に合わせた作者を連想させるが、<sup>21)</sup> 物語の顛末においては帝国主義の枠組みの中で「本物のメムサーヒブ」として生きることが期待されている。

結婚から一年後、ホッジナガルを訪問したルイス夫妻はダンとジョージの悲劇を思い出しながらも、取水権を得て当地が繁栄していることを嬉しく思う。そこには、まだチャンドニが望んだ婦人専門病院は建設されていなかったが、女子学校が設立されていた。クシュ・ハルが脳卒中で急死して新たな領主となったダレル・ベグは、妃にしたベアトリスと息子の三人で、豊かになった領土の恩恵を蒙りながら暮らしていた。「能無し」の彼は、帝国政府や近隣の領主との対外交渉のためにチャンドニが必要なことを悟り、彼女をシムラから呼び戻

20) Steel, *Garden of Fidelity*, 154 参照。

21) *Ibid.*, 172 参照。

して「参謀長」(chief advisor)に据えたという。彼女の発案により、種馬場ではイギリス人の競馬用の馬が育てられるようになり、ホッジナガルは当局からも収益を得られることになった。公に認められる地位を得たチャンドニは、もはや日陰者ではなく、ダレル・ベグの息子の摂政としても采配を振るうことが期待されていた。

ローズは、官舎の「赤いバンガロー」が人の住まぬ記念碑となり、陰謀を企てたチャンドニが出世したことを複雑な気持ちで受け止める。しかし、「本物のMEMSABIB」となった自分が夫と共に、ダレル夫妻から何事もなかったように歓迎されたり、町の女たちからお腹の子どもが男子であるように祈られ、安堵感を禁じえなかった。

## おわりに

19世紀のアングロ・インディアン小説に登場するインド女性といえば、その身分にかかわらず、大多数がインド人男性とイギリスの帝国支配者の双方から抑圧される存在である。彼女たちの置かれた状況を嘆く声はしばしば語られるものの、主体性をもって家父長制度や宗教的な掟に反逆して自己を開放する道を選ぶ人物は、アウトカーストや娼婦として物語の片隅に追いやられる。そのような文学的伝統を考慮すると、『陶工の親指』は男性中心のインド社会やイギリス支配に反逆するノーチ・ガールが立役者の、極めて例外的なアングロ・インディアン小説と言えよう。伝記を読む限りでは、作者のスティール夫人が、ノーチ・ガールをどのように捉えていたかは不明であるが、インドの女子教育や医療、ゼナナへの訪問を通して、その存在に興味をもったことは想像に難くない。夫と共にパンジャブ各地を転々とし、上流階級との付き合いもあった彼女は恐らく、その舞踊を見学するチャンスもあったと思われる。それにしても、実際には駐屯地の近くで「みだらな女」から侮辱された折に、その女を揜挙させたというスティール夫人が、<sup>22)</sup> 何故に帝国支配者の家庭に侵入したり、公共事業局の面目を損なうような行為をしたりするチャンドニを最終的に無罪放免にするばかりか、公認される地位に据えたりしたのであろうか。それは恐らくバネルジー (Amrita Banerjee) が指摘するように、<sup>23)</sup> 作者のフェミニズム志向に由来するものであろう。確かに悪役とは言えども、チャンドニがイギリス人をホッジナガルから追い出し、ダレル・ベグを籠絡して支配権を握り、婦女子のための病院を作りたいというなら、フェミニストからは評価される側面を持ち合わせていることは否定できない。それは、スティール夫人が、カスール滞在中にパンジャブの人々からチャナブ用水路を建設して、3万エーカーの領地の王妃 (Begum) になって自分たちを統治するように提案され、それを夢見たという彼女のフェミニズム志向のエピソードが、<sup>24)</sup> チャンドニの成功物語に繋がることから窺い知れる。ス

22) *Ibid.*, 133参照。

23) Amrita Banerjee, "The Other Voices: Agency of the Fallen Women in Flora Annie Steel's Novels" ed. by Susmita Roye, *Flora Annie Steel: A Critical Study of an Unconventional Memsabib* (Alberta: University of Alberta, 2017) 34-38 参照。

24) Steel, *Garden of Fidelity*, 86-87 参照。

ティール夫人が、複数の兄弟のために十分な学校教育を受けられず、女性教育視察官となっても、夫の職務のために自由な発言や行動が許されなかったことを想起すれば、売春行為はさておき、自らの技芸と才覚で生きるノーチ・ガールに、ある種の羨望を覚えたことは想像に難くない。<sup>25)</sup> およそ「女キプリング」が執筆したとは思えない『陶工の親指』は、作者自身がメムサーヒブとして帝国主義に組み込まれつつ、フェミニズムを志向してインド女性の医療・教育に携わったことを念頭に評価するべき、異色のアングロ・インディアン小説である。

#### 【参考文献】

- キプリング・ラドヤード著、橋本横矩・高橋和久編訳『キプリング・インド傑作選』（鳳書房、2008年）。  
 キプリング・ラドヤード著、橋本横矩編訳『キプリング短篇集』（岩波書店、1995年）。  
 志賀信夫 「インドの舞踊」『文芸復興』3号、1953年6月、44-51頁。  
 多田博一 『インドの大地と水』（日本経済評論社、1992年）。  
 田森雅一 「近代北インド古典音楽における社会音楽的アイデンティティの構築——英領インド帝国期の“カースト統計”と“ナウチ関連問題”を中心に」『国立民族博物館研究報告』35巻4号、583-615頁。  
 Banerjee, Amrita. "The Other Voices: Agency of the Fallen Women in Flora Annie Steel's Novels", ed. by Susmita Roye, *Flora Annie Steel: A Critical Study of an Unconventional Memsahib* (Alberta: University of Alberta, 2017) 34-38.  
 Beauchamp, Joan. *British Imperialism in India: Prepared for the Labour Research Department* (London: Martin Lawrence, 1934).  
 Buckley, RB. *The Irrigation Works of India*, 2nd ed. (London: E. & F. N. Spon, 1905).  
 Diver, Mud. *The Unsung: A Record of British: Record of British Services in India* (London: William Blackwood & Sons, 1945).  
 Dutt, Romesh. *The Economic History of India in the Victorian Age: from the Accession of Queen Victoria in 1837 to the Commencement of the Twentieth Century*, 3rd ed. (London: Kegan Paul, 1908).  
 Frowde, Henry ed. *The Imperial Gazetteer of India: The Indian Empire*, new ed. vol. 3 (Oxford: Clarendon, 1908).  
 Greenberger, Allen. *The British Image of India: A Study in the Literature of Imperialism, 1880-1960* (London: Oxford UP, 1969).  
 Nevile, Pran. *Nautch Girls of the Raj* (New Delhi: Penguin, 2009).  
 Oaten, Edward Farley. *A Sketch of Anglo-Indian Literature* (London: Kegan Paul, 1908).  
 Oldenburg, Veena Talwar. "Lifestyle as Resistance: The Case of the Courtesans of Lucknow, India" *Feminist Studies*, Vol. 16, No. 2 (1990) 3-6.  
 Patwardhan, Daya. *A Star of India: Flora Annie Steel, Her Works and Times* (Bombay: A.V. Griha Prakashan, 1963).  
 Powel, Violet. *Flora Annie Steel: Novelist of India* (London: Heinemann, 1981).  
 Sen, Indrani ed. *Memsahib's Writings: Colonial Narratives on Indian Women* (New Delhi: Orient Longman, 2008).  
 Sharma, Preeti. *Begum Samuru: Her Life and Legacy* (Delhi: Academic Excellence, 2009).  
 Steel, Flora Annie. *The Potter's Thumb: A Novel* (New York: Harper & Brothers, 1894).  
 Steel, Flora Annie. *The Garden of Fidelity: Being the Autobiography of Flora Annie Steel, 1847-1929* (London: Macmillan, 1929).  
 Steel, Flora Annie. *Voices in the Night* (London: Heinemann, 1900).  
 Taylor, Philip Meadows. *Seeta* (1872 rpt. New Delhi: Asian Educational Services, 1989).

25) スティール夫人は、10人の兄弟・姉妹がある家庭で育ったが、父親の投資の失敗で裕福な生活ができなかった。兄弟は何とか進学したが、彼女は半年あまりブリュッセルで学校教育を受けただけで、イギリスの学校に通うことはなかった。20歳の時にケンブリッジ大学を卒業したインド高等文官ヘンリーと結婚したのは、そのような家庭の事情による。彼女はインドで初めての女性教育視察官に任命されたが、学校の方針を度々批判して、当局から疎まれた。彼女がバンジャブ大学が読み書きの覚束ない森林局のインド人官吏に卒業証書 (diploma) を出した事を批判したために、夫のヘンリーは僻地へ左遷されたという。これらの経緯に関しては、Powel, *op.cit.*, 1-10; Steel, *Garden of Fidelity*, 159-81参照。